

WAWA

芸能・映画・ファッション...
マレーシア文化通信

Malaysia Cultural Post

[ワウ]
No. 6
2015
12月号

マレーシアWau(ワウ)のように、色鮮やかで誇り高いマレーシアの伝統芸能、ごはん、映画に焦点をあて、専門家がディープにご紹介するフリーペーパー

TAKE FREE

マレーシアが世界に誇る伝統工芸品、ピューター。錫(スズ)を主成分とした製品で、金属がかもしだすクールな印象とエレガントな美しさの両方を感じられる不思議な魅力があります。世界中にファンがいるマレーシア製のピューター。その名を知りしめたのが、創業130年の歴史をもつロイヤルセランゴール社です。1992年、マレーシア国王から「ロイヤル」の称号が与えられた由緒正しいブランドで、政府関係者や大使館の御用達。ピアマグ、花瓶、写真立てなど、洗練されたデザインながらも実用的なアイテムの数々は、マレーシアを旅したことがある人なら、誰もが目にすることがあるでしょう。この製品に魅せられて、日本で奮闘するひとりの女性がいます。

ピューターに魅せられて マレーシアの伝統を つなぐ日本人女性

取材・文 Oto Furukawa
(Writer, MalaysiaFoodNet)

写真提供 Aki Uehara(人物)
ROYAL SELANGOR(製品)



12枚のピューターシートを
つなぎ合わせて作る「メロンポット」



1950年代の作業風景



密閉性、湿度を遮断
する効果が高い「茶筒」

渡辺 那美
Nami Watanabe
株式会社ロイヤルセランゴール 代表取締役
1977年生まれ、東京都出身。両親がマレーシアに住んでいた影響で、マレーシアとの深い縁をもつ。ロイヤルセランゴール社のピューターを通して、マレーシアという素敵な国のことも知ってほしい、と語る

Information
全国の百貨店にて、本国から職人を招いたデモンストラーションのイベントを開催中。近日中のイベントはHati Malaysiaのウェブサイトに掲載予定



針金細工が好きだった幼少時代

ピューターと共に生きた子供時代

ピューター。あまりなじみのない言葉に聞こえるかもしれませんが、日本でも珍重された時代がありました。奈良の正倉院には、錫製の葉壺や水瓶が大切に保管されています。また、現代におけるピューター製の代表格といえば、ゴルフ、F1、テニスなどの競技大会での優勝杯。中には、今回取材したロイヤルセランゴール社が製造したものもあります。

ロイヤルセランゴール社と渡辺那美さんが初めて出会ったのは、子どものころ。両親がマレーシアで暮らしていたため、自宅には多くの同社製のピューターがあったそうです。あるきっかけで、2003年よりロイヤルセランゴール社との仕事をスタート。2013年、日本支社の代表取締役役に抜擢。現在は、銀座の和光、日本橋の高島屋など、全国約30箇所の百貨店と提携し、商品の卸を行っています。

金属のなかに見える、人のぬくもり

渡辺さんは、ピューターの魅力をこう語ります。「無機質な物質なのに人のぬくもりを感じます。それは、どの商品にもかならず、職人の手作業で行う工程があるからです。そのため、どれひとつとして同じものはありません」。

また、ピューターの特徴であるやわらかい性質。加工しやすく繊細なモチーフが彫れるのですが、その一方で、傷がつきやすいという点も。ところがこんな経験をされたそうです。「ご自宅が火事に遭われた方から、ティーポットの取っ手を修理して欲しい、と依頼がありました。新しいものにお取替えしましょうか?と伝えると、それは困る、取っ手だけを変えて欲しい、と。長年愛用されていたので、ティーポットには小さな傷がいくつもありませんでした。でもその傷が家族の歴史そのものだから、とおっしゃるのです」。

ロイヤルセランゴール社には現在約300人の職人が勤務し、彼らのもつ技術の結晶が商品となり、世に生み出されています。そして、それを暮らしのなかで使用し、時間を積み重ねていく消費者が、ピューターに命を吹き込んでいくのです。

伝統とは、人がつないでいくもの

マレーシアで受け継がれてきた伝統、ピューター。今回、渡辺さんにインタビューをして、伝統という言葉のイメージが変わりました。伝統とは、なんとなく自然発生的に生まれたものでは決まっています。伝統とは、ロイヤルセランゴール社が渡辺さんに伝えたように、人が人へ、強い意志をもってバトンタッチしてきたもの。そして、伝統をつないでいくのは、私たち自身。伝統とは、過去のものではない。今を生きる私たちにとって必要なものなのです。

マレーシアの語り芸能

アワン・バテル Awang Batil

一人で何役も演じ分ける「語り」の芸能は、世界中にあります。似た話も地域で顛末が違ったり、楽器の伴奏が入ったり、仮面を使ったり、様々な形で传承されています。マレーシアにもいくつかの「話芸」があります。村から村へと語り歩いた語り部、夜な夜な語られる物語に子供も大人も想像力を膨らませたのでしょう。マレー半島の代表的な話芸は、アワン・バテル (Awang Batil) やタリク・セランピツ (Tarik Selampit)。サバ州、サラワク州には、動物と人間の世界を通して、その土地の自然と向き合う方法を伝えるような物語が残っています。今回は、マレー半島の北部ペリス州のアワン・バテルをご紹介します。



アワン・バテルの継承者ロムリー・マハムド氏は、2015年8月、マレーシアの観光文化省国家遺産局より「人間国宝」にあたる「Tokoh Warisan Orang Hidup」を受賞されました。



取材・文
Aki Uehara
Mutiara Arts Production



テンテコ・テンテコ

歌い、語るは「アワン」の話

「生活苦から首を吊って自害を図るアワン。謎の老人に声をかけられ、謎のおまじないを授かる。それは、病床にある人の横に座り、「Srih Pinang(ピンロウジと石灰を包んだキンマの葉)」を嘔みながら病人の様子を見るところ。足下に謎の老人の影が見えれば、その病人は快復するが、枕元に老人の影を見れば、その病人は死にゆく、という…」

これは、日本の落語「死神」の話によく似たアワン・バテルの物語の冒頭部分。この先、物語は少し違った方向へ。王宮までその噂が届き、最後はアワンが王様になるという出世物語。

アワン・バテルは、ペリス州に伝わる語りの芸能です。語り部は胡座をかねて床に座り、真鍮の鍋のようなボール「バテル」をひっくり返し小脇に抱え、テンテコ叩きながら語り。リズムのつて歌うように語る場面と登場人物の台詞、楽器の演奏で場面が鮮やかに変化していきます。楽器をマレーの太鼓「ルバナ」やバイオリン、リード楽器「スルナイ」に持ち替え、仮面を付け替えるながら物語は進みます。

そこに広がるのはマレーシアのある村と王宮のお話。代表的な主人公「アワン」は、日本の「太郎」と同じような馴染みの深い名前です。村人たちの生活に近い物語に、精霊など、ちょっと精神世界の不思議な登場人物や巨人が現れます。「金のうんちをするヤギ」という子供が大笑いするような話もあるのです。かつては、何夜にも分けて一つの物語を語ったそうです。

三〇〇年前から伝えられてきた仮面と、真鍮のボール(バテル)を使って語るの、現在、唯一の語り部であるロムリー・マハムド氏。語り部は、言葉が分からなくても音楽を聴いているようにとても楽しいものです。

タリク・セランピツの演者は、三弦の弦楽器ルバブを引ながら歌い、語り、声色を変えて場面の变化や登場人物を演じ分けます。現在、実演者はとても少数です。演者 Che Mat Jusoh氏
Photo: Zamree Salleh



レポート

来日プログラム

マレーシアの《語り部》

二大巨匠がやってきた

カンボンの夜・紡がれる物語

2015年7月24日から4日間におたりアワン・バテルの語り部ロムリー・マハムド氏と、クランタン州に伝わる弾き語りの口承伝統「タリク・セランピツ」の演者であり、マレー伝統芸能の重鎮であるチェマト・ジュソー氏の来日プログラムを開催しました。

子供たちを対象としたワークショップのほか、Hati Malaysiaのマレーシア文化講座では、二つの話芸の上演スタイルや楽器の紹介と実演をお届けしました。公開公演では、日本から、語り芸・講談の講師・神田京子氏、口琴ラボから徳久ウィリアム氏と助川太郎氏をゲストに迎えました。

公演では、日本の落語「死神」に似たアワン・バテルの物語「アワン・アカール・ララ」を神田京子さんが、日本語版オリジナル「アワン太郎出世物語」として講談で語ってくださいました。マレーシアと日本の「話芸を一度にご紹介する貴重な機会となりました。

なお、本プログラムは、マレーシアを代表する国営石油会社ペトロナスの芸能文化支援事業の一環として、担当者ザハリ・ハムザ (Zahari Hanuzah) 氏とムティアラ・アーツプロダクションの協力のもと開催が実現しました。

主催：ムティアラアーツプロダクション 助成：PETRONAS / NUSA CENTRE
協力：Hati Malaysia / ODD PICTURES / すみだ川アートプロジェクト / パコモ

公演写真：Tomomi Kitami



公演出演者と主催者



会場の様子



アワン・バテル



タリク・セランピツ



講師
神田京子氏

マレーシア異端の新鋭。

エドモンド・ヨウ

取材・文 Rie Takatsuka (ODD PICTURES)
写真提供 Edmund Yeo

日本純文学とマレーシアのリアル

マレーシア人映画監督の中でも屈指の日本びいきであるエドモンド・ヨウ。昨年の東京国際映画祭で、『破裂するドリアン』(以下、ドリアン)が、マレーシア国内からは初のコンペティション部門への出品を果たしました。ヨウ監督は、学生時代は早稲田大学安藤紘平研究室で映画を学び、マレーシア人で唯一、カンヌ、ベルリン、ヴェネチアの三大映画祭に出品を果たしているウー・ミンジン監督の『タイガーファクトリー』*の企画・脚本をつとめるなど、学生時代からその頭角を現していましたが、意外にも長編作品は本作が初めて。痛々しく、しかし瑞々しくもあるマレーシアの今を、自身の視点でしっかり描いた渾身の作品です。

※2010年、マレーシアの実際の社会問題をモチーフに、日本渡航で別の未来を夢見る少女の話を描いた注目作。同じテーマで描かれるスピンオフショートストーリー「避けられない事」は、ミンジンのプロデュースによるヨウ監督作品で、同年、東京国際映画祭「アジアの風」部門にて併映されている。

マレーシアの実情に迫った問題作発表から1年

—東京国際映画祭から約1年、どんな1年でしたか?
とても忙しい1年でした。『破裂するドリアン』(以下ドリアン)と一緒に、たくさんの映画祭に行きましたし、仕事ではマレーシアのミュージシャンのPVを撮ったり、ドキュメンタリービデオの編集も手がけていました。すごくハードで、ちょうど2日前に終わったんです。

—充実してたのですね。ドリアンはどんな映画祭で上映されたのですか?

ロッテルダム、ソウル、シンガポール、カンボジア、スリランカ、サンフランシスコ、ロサンゼルス、それに、来週は香港アジア映画祭に行きます。それから、イタリアの映画祭のコンペにも招待されていますし、今月、来月は、フィリピン、インドネシアでも上映されます。

—素晴らしい!

あれから1年、いまだにこの映画に興味を持っていてもらって本当に光栄です。

—この映画が、多くの人、多くの映画祭に受け入れられたのはどうしてだと思いますか?

この映画にはマレーシアのいろいろな事が詰まっているからだと思います。現在の社会的、政治的問題や、マレーシアの忘れてはならない歴史、そして愛というような普遍的なテーマをベースに、困難な社会の中で成長しようとする人々を描いているからだと思います。この映画の内容は国内ではセンシティブな問題なので、国内で上映するのはかなり難しい。それにもかかわらず僕のキャストとクルーは本当に勇敢でした。この映画に信念を持ってきていたんです。実は、当初オファーしたマレーシアの俳優の何人かは、このシナリオが物議を醸



リアース工場の建設に反対する人々のデモ。実際のニュースをモチーフにしているところは、タイガーファクトリーの時から変わらない

す事が分かっていたので、断らざるを得なかった。だから、この映画が他の国の映画祭などで上映されるのは本当に嬉しい事だと思っています。

すべてのキャスト・クルーの挑戦によって

—それで、今回の主演は台湾の女優さんなんですよね。彼女は本当に素晴らしかった。

はい、本当に!僕は、ドリアン』の主人公、リム先生のキャラクターを演じる事は、マレーシアの女優にとっては非常に立場が難しくなると分かっていたので、台湾の女優、チュウ・チーインに頼む事を決めました。結果的に大成功でした。



教師リムを動めたチュウ・チーイン

—あなた自身に影響はないのですか?

ドリアンが、マレーシアで初の東京国際映画祭のコンペティション参加作品ということで、メディアは好意的でした。その他にも多くの映画祭で評価されたので、実際、僕は仕事が増えました。それにとても良いニュースとしては、ダフネ・ロー、コー・ジョン、ジョーイ・レオン、みな、前よりずっと有名になりました。主演のチュウ・チーインもその後出演したTVシリーズが認められ、台湾の大きな映画祭、Taiwan's 50th Golden Bell Awardsで最優秀女優賞を受賞しました。こういうのは監督として本当に嬉しいですね。

—あなたの映画が国際的に有名になることで初めて「マレーシア映画」に興味を持つ人もいますが、あなたの映画はマレーシアでも異色ですよ。 「マレーシア映画」とあなたの今後の活動についてどう考えますか?

僕の答えは非常にシンプルです。「良い映画を作る事」。他の国の国際映画祭に招待される時、それは結局のところ、僕の映画はマレーシアを代表しています。だからこそ良い映画を作らないと。



エドモンド・ヨウ

Edmund Yeo(楊毅恒) 1984年生まれ。映画監督、脚本家、プロデューサー。早稲田大学 国際情報通信研究科 安藤紘平研究室に留学し博士号取得。2009年、短編監督作『金魚』でマレーシア人としては最年少でヴェネチア映画祭コンペティション部門に招待。その後『避けられない事』(2010)が釜山国際映画祭で最優秀アジア短編賞を受賞するなど多数の国際映画祭で活躍中。プロデューサーとしては、ウー・ミンジン監督の『タイガーファクトリー』(2010)等の作品でカンヌ国際映画祭より正式招待および東京国際映画祭 審査員特別賞を受賞。2014年『破裂するドリアン』の河の記憶』で長編デビュー。マレーシア人としては初の東京国際映画祭コンペ部門出品となった。



『破裂するドリアン』の河の記憶』2014
128分/北京語/マレー語/広東語
監督/脚本/編集:エドモンド・ヨウ

—実際、あなたが映画を撮るときは、どんな演出をしているのかとても興味があります。主演のチュウ・チーインは本当に素晴らしく、白熱した演技で魅せられました。彼女にはどんな演出をしたのですか?

今回、リハーサルする時間がなかったので、彼女がマレーシアに入る前から、たくさんディスカッションしました。僕たちは三島由紀夫の作品について語り合いました。そう、ドリアン』のストーリーラインは三島由紀夫の作品からアイデアを得ました。ほとんどのシーン、僕は彼女に、説明をするだけでした。僕は彼女がどう演技するか楽しみだったからです。

—未だ見ていない方のために詳しくは書けませんが、クライマックスのシーンは、とても心に迫る、リアルな表情でした。

あのシーンも、当初はもっと違った演出をしていました。彼女はキャラクターの行動からではなく、心情を表情に現しました。彼女のこういった演技のアプローチは周りの俳優にもとても良い影響を与えました。彼女は、役柄だけではなく、本当の意味で先生でした。

—そして興味深いキャラクターがもう一人います。メイ・アン。困窮した暮らしから抜け出せずに絶望しているように見えます。

彼女の声はマレーシア人の声です。変えたくても変えられない。この映画の中でリム先生とメイ・アンは僕の考え、フー・リンとミンの声は僕の感情を現しました。



主人公ミン(コー・ジョン)と、メイ・アン(ジョーイ・レオン)

マレーシアという国はそんなに単純じゃない

—この映画はある意味、あなたの分身なんですね。間違いなく。一部のお金に恵まれているマレーシア人は海外に勉強に行くこともできます。ミンのように。でもメイ・アンのように何もできない人もいます。結局



この作品は間違いなくヨウ監督の分身であるという

のところ、変わりたくても、何をどうやって変えたら良いかわからないのです。すごく悲しい事です。

—あなたも、オーストラリアや日本へ留学した恵まれた若者の一人だった。メイ・アンのような人を映画

として描くことは、使命だったかもしれないですね。はい、外国に行って自分の国から遠くに離れた時、今まで見えなかった事が見える事は多々あります。自分の国の歴史に興味をわき、好奇心が芽生えます。20代から30代にかけて、マレーシアから離れたことにより、僕の身にもそういったことがおこりました。

—マレーシアの良いところにも改めて気付いた?

はい、マレーシアはマルチカルチャーの多言語国家であり、異文化を愛する素晴らしい文化を持っています。国を離れても、どこの文化とも適応するのが容易です。僕はこの10年、マレーシアで撮影された日本映画を観た時は、悲しくなりました。マレーシアはエキゾチックでココナツの木がある単純な国ではありません。はるかに複雑で奥が深いのです。

—最後に、あなたの分身のような作品を産み出し、さぞ、消耗したのではないですか?

いえ、僕はこの作品を作っているときこそ生きていたと感じました。それまでの自分は半分眠っていたようなものです。これからいろいろな場所へ行き、多くの映画を見、本を読み、もっともっと物語を書いて行きます。

—これからも期待しています!

インタビューを終えて/昨年の東京国際映画祭のコンペティション上映時から取材したかったエドモンド・ヨウ監督。ようやく落ち着いた頃かと思いきや、まだまだ作品は世界中を回っていました。彼が日本文学に造詣が深い事は聞き及んでいましたが、彼の作品が、国や世代を超えて受け入れられるのは、この文学的表現力と洞察力なのだ改めて感じました。今後どう切り込んで行くのか今からとても楽しみです。(2015年11月取材)



「カヴァディ」を担ぎ、ムルガン神を乗せた神輿について歩く信者



祈りを捧げるため供物を手に、神輿について歩く信者

神輿が通る道では、信者たちが椰子の実を地面で叩き割り、誓いを立て、祈りを捧げる



Thaipusam

写真 Leonard Selva
文 Aki Uehara

ヒンドゥー教の主神シバ神の息子「ムルガン神」を崇める祭事「タイプーサム」。神々への願いが叶った信者たちは鉄串を類に通し、体中を鉤(フック)で引っ張るなど、寺院まで苦行の行進をする。色鮮やかに装飾された祭具「カヴァディ (Kavadi)」を背負ったトランス状態の信者を家族と7人ほどの太鼓部隊が囲む。ハイビッチで乾いた太鼓の音の層、入り組んだリズムに乗せて拡声器から響く歌に周りの者も高揚し、自然と体が揺れる。行進の道は人々で溢れかえり、音の渦と熱気に押されて前へと進む。信仰心と祈り、喜び、感謝の念が体現される祭の姿である。2016年は1月24日に開催される。

WAUの感想をお聞かせ下さい

発刊から2年目を迎え、よりよい誌面づくりのために、皆さまの声をお聞かせください。下記、アンケートにご回答いただいた方の中から、**抽選でサバ州のおみやげ (ジンジャーティーまたはサバティー) を差し上げます。**①お名前②メールアドレス③住所、電話番号④WAUをどちらで入手されましたか?⑤今までで一番印象に残っている記事は?⑥今後、取り上げてほしいトピックは?⑦感想があればご自由にお書きください。アンケートは、メールにて、1月15日までに<info@hatimalaysia.com>あてにお送りください。なお、おみやげ当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。

Co.KODAN & POETRY

各地の「民話」を詩と講談で紡いでいます

詩人 桑原滝弥 shijinrui.blogspot.jp

講師 神田京子 blog.kandakyoko.com



マレーシアごはんの会

<http://www.malaysiafoodnet.com>

料理教室、ごはんイベント開催



マレーシアリゾートクラブ

<http://mrcj.jp>

マレーシア・ボルネオ地域専門旅行会社

(株)エムアールシージャパン / 東京都知事登録旅行業 3-5248号

WANTED

サポーター・広告募集

WAUを応援してくださるサポーターを募集しています。詳細はお問合せください。印刷費などの活動資金として、大切に使用します。



ムティアラ・アーツ・プロダクション

<http://mutiara-arts-production.com>

文化交流事業の企画制作、通訳・翻訳業



オッドピクチャーズ

<http://odd-pictures.asia>

国内外映像映画制作・マレーシアロケ

編集後記



古川 音
Oto Furukawa

ライター。首都クアラルンプールに4年滞在した経験を活かし、「All About」や「CREA」ウェブサイトにてマレーシアの記事を執筆。また「マレーシアごはんの会」にてイベントや料理教室を主催。
古川音 HP <http://www.otofurukawa.com>
マレーシアごはんの会 HP <http://www.malaysiafoodnet.com>



芸能 上原 亜季
Aki Uehara

ムティアラ・アーツ・プロダクション代表。AFS生として一年間マレーシアの高校に留学。Universiti Sains Malaysiaの大学院にてマレーシアの伝統芸能の研究を行い、修士号取得。国際文化会館勤務を経て、現職。東南アジア芸能コーディネーター、イベント企画・制作、記事執筆、マレー語通訳・翻訳。 <http://mutiara-arts-production.com>



映画 高塚 利恵
Rie Takatsuka

映像プロダクション、オッドピクチャーズ代表。インディペンデント映画プロデューサー。日本国内にて映像によるプロモーションの企画、撮影。マレーシアの映像制作プロダクション(ODD PICTURES MALAYSIA)と連携した映像・映画製作など。
HP <http://odd-pictures.asia>